中国近代美術の真実

松村 茂樹

以前、本書の著者である陸偉榮氏が訪ねてこられ、中国語で執筆された論文「豊子愷与竹久夢二」を示された。豊子愷は『子愷漫画』で知られる中国漫画の鼻祖であり、竹久夢二はいわゆる「夢二式美人画」で有名な画家である。

論文には、ほぼ同じ構図の子愷と夢二の画が図版として掲げられていた。子愷が夢二の画を参考にしたという。これには驚いた。中国漫画の鼻祖の漫画は、実は大衆的人気を誇った日本の画家のスタイルを学んだものであったというのだから。さらには、子愷が参考にしたのは「お葉」で有名な夢二の美人画ではなく、早期、つまり「社会主義時代」の画であったという。夢二といえば美人画ばかりを思い浮かべてしまう現状では、子愷の漫画と夢二の画を結びつけて考えようとすること自体なかなかできはしない。そんな中、貴重な成果をあげられたと感服したものだ。

この成果は、丹念な資料の調査および操作に基づいている。まず、子愷の随筆をはじめとする文献を精査し、子愷が夢二の画集を購入していることを確認した上で、『子愷漫画』などに収められた子愷の漫画と、子愷が購入した画集に見える夢二の画を一つ一つ照合するという丁寧な作業があった。陸氏は、子愷の資料を主に上海図書館で、夢二の資料を主に国会図書館で捜集されたようであるが、こういった中日を叉にかけた調査を実行できる行動力も見習わねばなるまい。

そんな成果を拝見してから七年後、本書に接することになった。その間に、陸氏は、早稲田大学博士後期課程を修了し、博士（文学）の学位を取得された。本書は、この学位請求論文をもとに、加筆訂正し、再構成したものという。もちろん、「豊子愷与竹久夢二」も日本語になり、盛り込まれている。まずは目次を掲げておく。

２０世紀日中美術交流研究　序説
第Ⅰ部　民国期の画家にみる日本との交流
第１章　陳師曾と大村西崖――近代文人画をめぐって
第２章　早期の洋画――日本における李叔同の活動
第３章　１９２０年代以降の洋画――関紫蘭における日本画壇の影響と洋画の完成

陸偉榮著
中国の近代美術と日本
――２０世紀日中関係の一断面

A5判　290頁
大学教育出版［2940円］

第Ⅱ部　日中戦争時下の画家たち
第1章　淪陥区北京の画家
第2章　淪陥区上海の画家
第3章　国統区重慶の画家
第Ⅲ部　豊子愷様式の創生から完成へ
第1章　竹久夢二からの影響――夢二の発見と独自様式の完成
第2章　抗戦時期の豊子愷――作品集『戦時相』の成立
第Ⅳ部　装幀にみる日本美術の受容
第1章　魯迅と近代中国の装幀
第2章　陶元慶の出現
第3章　「図案家」陳之佛
第4章　銭君匋について
第Ⅴ部　展望と課題

これを見て、「豊子愷与竹久夢二」は、単に豊子愷の画風を講じたものではなく、「中国の近代美術と日本」を論じるための嚆矢であったことがわかった。以下、各章の内容を紹介しておこう。

第Ⅰ部第1章では、近代において、過去のものとされつつあった文人画の価値を訴えた陳師曾が、当時日本で「文人画の復興」を唱えていた大村西崖に影響を受けていたことを、両者の交友を辿ることにより、明らかにしている。

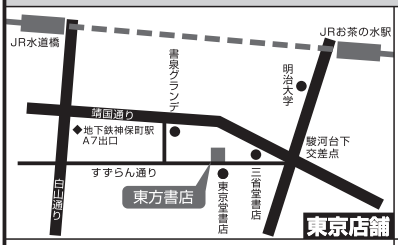
同第2章では、東京美術学校で洋画を学んだ李叔同（後の弘一法師）が黒田清輝から影響を受けていたことを慎重に考証すると共に、日本の漢学者との交流を資料から発掘し、それが李叔同に具わっていた伝統文化の素養によるものであることを指摘している。

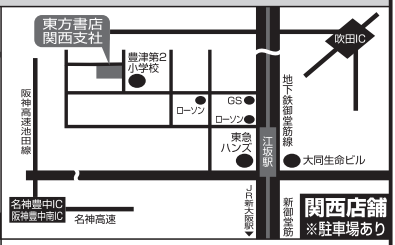
同第3章では、女流画家・関紫蘭が日本留学派の陳抱一らから洋画を学び、さらに陳抱一の友人である有島生馬と中川紀元を通じて文化学院に留学し、「日本洋画」によって、洋画の精髄を本格的に学び、大成したことを論じている。

第Ⅱ部第1章では、日中戦争時期、「日本人とは会わなかった」という「伝説」を有する斉白石、東京の高島屋で開いた個展を「強迫」によるものとした蔣兆和の言動の偽りを資料によって明らかにしている。

同第2章では、日本軍および日本の傀儡であった汪兆銘政権の誘いを拒んだと

中国関係専門店　東方書店〔店舗のご案内〕　ご来店をお待ちしております





地下鉄神保町駅●半蔵門線・都営三田線、新宿線A7出口より徒歩1分／JR御茶ノ水駅●御茶の水橋口より徒歩10分

地下鉄江坂駅●5号出口より徒歩5分（JR新大阪駅より地下鉄御堂筋線で2駅目）

〒101-0051　東京都千代田区神田神保町1-3
TEL:03-3294-1001／FAX:03-3294-1003
営業時間：10時～19時（月～土）/12時～18時（日祭）

〒564-0063　大阪府吹田市江坂町2-6-1
TEL:06-6337-4760／FAX:06-6337-4762
営業時間：10時～18時/土日祭休

される劉海粟が、実は日本の軍人や実力者と関係があったこと、また、日本に留学し、日本人妻を連れ帰ったことだけを理由に「漢奸」とされた陳抱一が受けた理不尽な扱いを指摘している。

同第3章では、抗戦を煽る歴史画や、勇猛な「馬」「鷹」などの画によって「抗日」に誘導し、「一貫して共産党を支持」していたとされる徐悲鴻が、実は「消極的抗日」の国民党主催の展覧会に出品していた事実を暴露している。

第Ⅲ部第1章では、前述の豊子愷が竹久夢二から受けた影響を論じている。

同第2章では、抗日戦争を描いた豊子愷の『戦時相』が、同時期に見られる敵への怒りをかきたてるための宣伝画ではなく、戦争そのものの悲惨さを示し、そこに生きる人々への同情を描いており、それは豊子愷の文人的素養によるものであることを指摘している。

第Ⅳ部第1章では、日本に留学した魯迅が、日本の書籍装幀に触れ、参考にしたことを論じている。魯迅の『壁下訳叢』装幀が日本の『先駆芸術叢書』のものをそのまま取り入れたものであることを発見し、実例をあげている点が圧巻。

同第2章では、魯迅と深く関わり、魯迅の勧めで書籍装幀を手がけるようになった陶元慶の図案が、日本の雑誌『白樺』などの「日本スタイル」から影響を受けていることを具体的事例によって検証している。

同第3章では、東京美術学校で図案を専攻した陳之佛が、その成果を中国の書籍装幀において実践したことを、事例をあげて紹介している。陳之佛『図案法ABC』の一部図案は、東京美術学校教授・島田佳矣『工芸図案法講義』から流用しているとの指摘は注目。

同第4章では、書画篆刻家として有名な銭君匋の書籍装幀家としての一面に照明をあて、魯迅、陶元慶を通して、日本の影響を色濃く受けていたことを論じている。また、銭君匋、陶元慶らは、魯迅の提唱した「拿来主義」によって装幀家として育まれたとする。

全編を通読し、これまで漠然としていた中国の近代美術に与えた日本の影響について、ほぼ初めて具体的に論じた力作であると思った。同時に、執筆には大きな困難を伴っていたであろうとも思った。陸氏も序説の中で述べておられるが、中国では、政治的にも文化的にも、外国からの影響を論ずることを「タブー視」してきたからだ。とりわけ、抗日戦争の敵国であった日本からの影響となるとなおさらである。

だが、研究とは、真実の追究であり、陸氏も研究者として、それを実行したに過ぎない。陸氏をこの研究に駆り立てる原動力は、日本留学の経験であろう。留学とは、その国に何かを求めている者が行うのではないか。留学経験者はそれを自覚するがゆえに、先達、つまり自分より以前に留学した者が求めるところをも理解し得るのである。

陸氏は「あとがき」で、本書が「日中関係の良化に寄与できたら、幸いである」と記して、結んでいる。真実の追究は、よりよい未来をもたらすはずだ。本書が今、出された意義は大きい。

（まつむら・しげき　大妻女子大学）